

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

個人研究

2021年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職名	氏名
	社会学部 准教授	片上平二郎
研究課題	単身者空間としての都市の比較研究 ——「コンビニ」的な生活を可能にするもの——	
研究期間	2021年度	
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 500,000円 / (採択金額) 500,000円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと。)

本研究は、日本の都市的な生活空間を象徴する場としての「コンビニ」を考察するために、都市の比較研究を行うものである。政治思想史研究者の神島二郎は日本「近代」の精神的なあり方を「個人主義」とは異なった「単身者主義」として見る視点を提起し、日本的な都市風土の分析を行っていた。これまで、この神島の視点を参考にしながら、日本における消費社会を「単身者性」について理論的、文化史的に分析する研究を行ってきたが、本研究はその視座を拡張するために、調査地に赴いたかたちで、都市における「コンビニ」的な消費空間の比較研究を行うものである。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[コンビニ] [モダニティ] [単身者文化]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**①日本のコンビニ史の確認作業**

本研究は当初、海外におけるいくつかの地域をめぐるそれぞれの国における「コンビニエンスストア」的な消費空間の比較分析を行うことを想定していたが、新型コロナウイルスの当初の想定以上の拡大・長期化を受け、8月頃に基本方針を日本国内の各地域における「ローカルコンビニ」の比較調査へと方針を切り替えた。その方針変更によって、「国際比較」を行う前に一度、暗黙の内に「日本の都市文化」を「東京の文化」と等閑視してしまいやすい文化研究の方向性を相対化する視点を得ることが可能になった部分もある。「日本」国内の「生活空間」の多様性を踏まえる作業の中で、同時に日本での「コンビニ」普及とその後の展開に関する「歴史」的視座を踏まえることの重要性も再度、確認された。

日本における「チェーンストア」方式の実装の1つのあり方として、1970年代以降に日本各地に中小さまざまな「コンビニエンスストア」が発展していくこととなる。そこで展開された店舗の多くは、現在のいわゆる「コンビニ」と略されるような形態と異なり、「ミニ・スーパー」と呼ばれることもあるようなものでもあった。地域商店街の酒屋や肉屋などの個人的な経営上の問題や跡継ぎ問題を解決するための方策として「コンビニエンスストア化」が推し進められたこともあった。このような「コンビニエンスストア史」を、食品業界紙や店舗運営マニュアル書籍、もしくは映像資料などを分析しながら、その具体的内実について検証を行った。「コンビニエンスストア」の歴史については、その初期から「国内第一号店」についてすら諸説が存在するような状態であり、“身近である”ものであるだけにその歴史の確認作業は後回しにされてきた印象もある。より詳細な資料集を行い、「コンビニ」の普及史を考えたい。

②「ローカルコンビニ」調査

日本各地域にある大型チェーン店に属していない「ローカルコンビニ」に関する調査を行った。「コンビニエンスストア」拡大期に誕生した多くの個人店やローカル・チェーン店はすでに大きな減少傾向にある。特に2010年代において、セブンイレブン、ローソン、ファミリーマートの「3大チェーン」の存在感の大きさの中で、それ以外の店舗は閉店や合併の速度を増している。こうした状況の中で、いまだ現存している「ローカルコンビニ」に関する調査が必要であると考え、それらの店舗の位置関係や運営状況についての観察をした。その際に、現在、世間で流通している「コンビニ」イメージとはずれるような店舗であったとしても、「コンビニ」を名乗っていたり、もしくはインターネット上などで「コンビニ」として語られていたりした場合、調査対象地として選択を行った。

新型コロナウイルスが拡大する状況の中でインタビュー調査などの滞在型調査が行いづらい状況であるために、今期においては、まず調査地域を設定し、各地域において存在が確認された「ローカルコンビニ」を可能な限り、巡り、大まかな現状や地理関係を確認することを意識した。また、近年閉店した店舗の跡地も可能な限り、巡ることによって、閉店後にその場所にどのような種類の商売がおこなわれているかなどの確認も行った。調査地は主に以下の場所である。

北関東地域調査 (ローカル・チェーン店の後継店や跡地を中心とした地理的把握など)

群馬県 「ローソン present SAVE ON」、「SAVE ON」後継店、「スーパー伊勢屋創業地」、栃木県「タイムリーワン跡地」、「キャプテンハウス」、茨城県「コンビニエンスナカムラ」、「CVS じょうのうち」、「コンビニエンスストア OHSAKAYA」

東海地方調査 (「コンビニ発祥地」とされる場所の調査、ローカル店の地理的把握)

岐阜県「ひまわり六条店」、「ひまわり茜部店」、「多治見駅 (国内初のコンビニ出店地と語られる場の1つ)」、愛知県「コストアの1号店跡地 (「日本のコンビニエンスストア発祥の地」の碑)」、「ニュージョイスゆうびんや」、「フジファミリーショップ前山店」、「タックメイト」、「ヤマダイセンガ」、静岡県「マルコシ」、「コンビニエンスクボタ跡地」

函館および東北調査 (ローカル店の地理的把握、セイコーマートやハセガワの調査)

函館、「タウンマート YAMAMOTO」、「ハセガワストアベイマート店」、「セイコーマート 函館五稜郭店」、「ハセガワストア五稜郭店」、「今野商店跡地」、「ハセガワストア七重浜店」、「ハセガワストア函館駅前店」、青森県「ホームコンビニ・ニコット」、「なないちまる」、「モンマートマルゼンさとう」、「コンビニ&リカー・タカハシ」、「オレンジハート平内中野店」、「エルマートクマサワ」、「オレンジハート十和田東店跡地」、「オレンジハート六戸バイパス店」、「ポップコーン」、岩手県「コンビニエンスいのうえ」、「ホットスターたむら跡地」、「ワイショップ松園店跡地」。

中国地方および近畿地方調査

広島県「チャーリップ高屋店」、岡山県「オアシス (跡地)」、「コンビニエンスクボ」、兵庫県「ナイトショップいしづち」、「コンビニエンスワタナベ (跡地)」、「ミニコンビニ・センターショップ」、大阪府「千里園三丁目 コンビニー号店「マイショップ」出店地」

研究成果の概要 (つづき)

それぞれの「コンビニ」を確認する中で、各地域における住民の「生活」との関係や経営の維持の戦略などにおいて、当初の予想よりもはるかに大きな違いを確認することができた。しばしば「均質化」の社会的装置として解釈される「コンビニ」文化が内包する多様性は改めて確認すべきものであるだろう。

新型コロナウイルスの流行状況などを鑑みつつ、今後はさらに調査地を広げていくとともに、本研究の観点から見て重要であろう個別店舗を選別し、インタビュー調査などの作業を行っていくことを考えている。

③「コンビニ」の表象分析

社会的に強い存在感を持つ「コンビニエンスストア」ではあるが、小説や映画などにおける扱われ方を見ると、その存在感に比して、その扱いは大きなものではない。例えば、小説中に「コンビニ」の文字があった場合も、小説内の事件は「店内」で起きることよりも、しばしば「店の前」で起きることが多い。「コンビニ」に対して巷間でもたれているイメージは、「文学」と“相性が悪い”ものと言えるかもしれない。そのような状況の中で、村田沙耶香の小説『コンビニ人間』や劇団チェルフィッチュの演劇『スーパープレミアムソフトWバニラリッチ』など、批評性を持ったかたちで「コンビニ」を描き、国際的にも評価されている表現作品がいくつか存在している。その内容分析を行うとともに、これらの作品の国内と国外の感想や評判の違いを見ることによって、「日本」の都市における「コンビニエンスストア」の位置付けの分析を行った。

また、現在「ライト文芸」と呼ばれるヤングアダルト向けの小説ジャンルが人気を誇っているが、その中にもいくつか、「コンビニ」をタイトルに入れた作品が存在している。それらの作品に登場する「コンビニ」は、しばしば「地方」において、人の心的交流が親密なかたちで行われる「食堂」や「雑貨店」のようなイメージで描かれている。そこに登場する「コンビニ」の姿は、「東京」などの「都市部」の感覚からすると違和感を覚えるものであるかもしれないが、今回の調査において把握した各地の「ローカルコンビニ」の現在の在り様（もしくは少し前の在りえた姿）を重ねて見ると、作中の位置付けが理解できる部分もある。ある作品が誰によって書かれ、また誰によって読まれるのかという問題を意識しながら、「ライト文芸」内に登場する「コンビニ」の表象を分析する作業も意味を持つものであるだろう。

④現代社会の理論的分析

広義の「コンビニエンス」文化は、その背景に「消費社会化」とともに「時間的効率性」の観点が存在している。ドイツの社会理論家ハルトムート・ローザは、幾多の生活時間調査の結果を踏まえながら、独自の「加速社会論」によって現代社会の変容についての理論的枠組みを生み出そうとしている。まだ邦訳が存在していないローザの理論の日本に紹介するための翻訳作業を行うと同時に、この「加速社会化」という大きな枠組を日本の「単身者文化性」と結びつけながら、再解釈していきたいと考えている。「加速社会論」の中では、家族と雇用の2つの領域を社会的変化が大きなかたちで現れ出る場所として扱っているが、日本の文脈の中で、単身生活化（そこでの食事を代表するものとしての「コンビニ弁当」）や非正社員化（その中で「フリーター」イメージを代表するものとしての「コンビニ店員」）などを、日本における「生活時間調査」のデータなどと絡めながら分析する作業に現在、着手している。

その他、イタリアの哲学者ジョルジョ・アガンベンの「生の形式」に関する議論の中の「生」という語の意味を「生活」にまで拡張することで、「生活の形式」という概念に関する理論的な考察を展開していくための準備を行っている。

また、日本で消費社会化・大衆社会化が目に見え始め、展開していく時期である1950年代半ばから1960年代にかけての「社会意識論」や「生活構造論」がどのようなものであったのかについて、現代視点から再解釈していく作業を行っている。今年度は特に、日高六郎についての分析を行い、彼の「青年性」へのこだわりを分析した。日高の「青年」へのこだわりは、本研究でいうところの「単身者性」と交差する側面を持つものであると考えている。過去の社会学の理論的背景を抽出する中で、日本社会における独自の理論的考察がどのように生み出されてきたのかを確認していきたい。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①雑誌論文

「小さなメディアとフェミニズム」(第85回ジェンダーセッション 開催レポート)

(「立教大学ジェンダーフォーラム年報」, 23, (2022年3月))

その他、「ローカルコンビニ調査」から得られた知見、そして、現代文芸・映像作品などにおける「コンビニ」の表象分析については、2022年度中に論文化して、学会誌に投稿予定である。

また、「日高六郎:「やさしさ」と「ただしさ」の社会学 —ある戦後民主主義者の相貌—」という論考が22年10月頃に刊行される書籍に掲載予定である。

②図書

[翻訳 (部分参加)]

ハルトムート・ローザ『加速する社会』(出口剛史監訳、福村出版、2022年5-6月刊行予定、5部8部担当)

(また、年度内に刊行される予定になっている同著者の『共鳴 (仮)』の翻訳にも参加している)

本研究の内容を踏まえた『単身者のモダニティ (仮)』という新書を2022年度内に刊行する予定である。(ただし、新型コロナウイルスの流行状況の中で、調査がどこまで可能になるかによって、状況が変動する可能性も考えている)。

③シンポジウム、公開講演会など

④その他

ローカルコンビニ分析や、現代社会に関する理論的考察については、日本社会学会や日本社会学理論学会での発表を考えている。